

プロローグ

(二〇二三年六月)

「お父さん、今度の夏休みには京都に旅行に行きたいんだけど、5万円を貸してくれないかなあ」

「えっ?! 京都に? 彼氏と二人だけでって云うのはダメだよ」

「えっ?! どうしてえ?」

「あつたりまえだろ。男っていうのはなあ、皆んな狼なんだぞ! 昔、ピンクレディーというアイドルが歌って大ヒットしていたもんだよ。『男はオオカミなのよ、気をつけなさい』。羊の顔していても、心の中は、オオカミが、牙を剥く、そういうものよ。『ってね。テレビやラジオからは毎日のように流れてたよ。だから、ダメに決まってるだろ!』とにかく反対なのに、お金を貸してくれって言われたって、そりゃあ無理だろ! (まあ、金が無いと言えば、無いんだけど)」

「お父さんだつて、昔、若かった頃には彼女くらいは居たでしょ!」

「エッ… (何だか、痛いところを…)。いや、まあ。居なかつたかなあ…」

その頃には、いつも、周りは男友達ばかりだったからなあ… もっぱら、天下

国家の話ばかりしてたもんだよ 😊。だから、女性との出会いの機会なんてのは、あんまり、否、滅多に無かったかなあ 😊

「うっそだあ！ お父さんは、出会いの機会が無かったんじゃないやあなくて、機会はあつたけども、それを生かさなかつただけなんだよね（笑）」

「……………」

”生かさなかつただけ……”と云うのか、”生かせなかつただけ……”と云うのか、”せ”と”せ”の一字違いなだけなのだが意味の方は大きく違ってくる。

どちらかと云うと、私の場合には後者の方に該当していた様な思い当たりは無いこともない様な……。🦋

まあ、悲運な青少年時代を遡ってみるに、やはり、女性の少ない環境ばかりを歩いていた様なものだから、出逢いの機会と云うのは、自ずと少なかつた様なもの……。😞

只、そついつ風に言われてみれば、その様な機会と云うのは、これ迄の人生上においては、身近な処であれ、或いは、国の内外であれ、確かに、幾度かはあつたと云う認識はないものでもないよつた。

半世紀以上前の若かりし頃を遡り顧みるに、貴重な体験や懐かしい思い出の数々と云うのは走馬灯の様に浮かんで流れる、また遠くへと消え去って行く様だ。

人生上では無数の分岐点での選択肢の機会がありながらも、結果的には、常に、何

れか一本の道のみを選択し、辿ることになるので、振り返っての他の道を行んだ場合との比較検証は出来ないのだが、誰であれ、もし、かの分岐点での機会に他の道、或いは他のパートナーを選択をしていたとしたら、以降での周りの風景と云うのは少なからず、今とは大きく変わったものになっていただことだろうか。

そう云えば、丁度、五十年前のスイスのユースホステルに宿泊した際には同宿相部屋だったアメリカ人のステイブからは、先の我が娘に言われた内容と、ほぼ、似た様なことを言われたことがあったのを、ふと思ひ浮かんだものだった。

「折角の貴重な出逢いの機会がありながら、どうしてそれを生かさなかったのか？」と。

ふと、思ひ起こしてみると、丁度、あれからの五十年と云う大きな節目でもあったので、話の流れを五十年前に遡っての記憶の糸を手繰ってみることにした。

人生と云う長旅の中での五十年前のひとコマ、ひとコマのシーンが瞼の裏に浮かんで来るよう様だ。